移行期としてのフルシチョフ期（その一）

――現実主義とユートピアニズムとの混淆――

木村汎

目次

第一節　序論
第一款　フルシチョフの倭小性？
第二款　移行期としてのフルシチョフ期
第三款　方法論について
第二節　「強制」から「報償」へ
第一款　フルシチョフの「グラーシ共産主義」（以上本号）

第一節　序論

第一款　フルシチョフの倭小性？

一九六四年十月十四日、「老齢と健康の悪化のため」[1]突如解任されるまで、[2]ニキータ・C・フルシチョフは、十年

近くにわたり、ソ連首相兼党第一書記として　ソビエト政治の最高指導者たる地位を占めていた。ところが、このいわばソ連第三代目の指導者は、先代の二人即ちレーニンおよびスターリンと比べる時、その思想ないし政策、パーソナリティ、そしてソビエト内外に与えたインパクトにおいて、極めて小型・倭小[3]の政治家だった、というのが通常の評価である。

たとえば、レーニンの「賛美者」でありトロツキーの熱烈なる「信奉者」[5]であった故Ｉ・ドイツチャーが、反ス（アンチ）ターリン主義者としてその生涯を貫き通したことは余りにも著名な事実であるが、そのドイツチャーですら、スターリン期にかんしては未だ何か語りえても、フルシチョフ期に至っては語るべきなにものもない、[6]と大変手厳しい評価を下す。けだし、フルシチョフ主義は、なんらそれ自身の「積極的なアイディア（ないし政策）を体現していない」[7]からである。

たしかに、思想面を一例にとってみても、ドイツチャーの言うごとく、レーニンには、共産党前衛論ならびに帝国主義論、スターリンにあっては、一国社会主義論のような、マルクス主義の独創的な展開[8]があった。他方、フルシチョフには、これらに匹敵しうるような独自性豊かな理論ないし政策が存在したか？　通常、フルシチョフ主義ないし路線を代表するものとして挙げられうるのは　内政における非スターリン化[9]および全人民国家論[10]、外交における三原則―平和共存、社会主義への多様な途（暴力なき革命）、戦争不可避論の否定―の宣言等、である。筆者自身は、これらを、伝統的マルクス・レーニン・スターリン主義からのかなり大きな逸脱、修正とみなす者であって、したがって、当時のソビエト学者が擁護した如くそれらを「マルクス・レーニン主義の創造的発展」（傍点―木村）と見

る見解に与しない一方、又これらを単に「スターリン路線の俗流化」[11]と過小評価する見解にも抵抗を感ずるものである。だが、これらの見解の妥当は、ここでは、ひとまず差しおくことにしよう。

また、フルシチョフの例えばスターリンにたいする倭小性は、Z・ブジェジンスキー教授が述べるが如く、[12]それぞれの政敵（ライバル）たちを引合いに出す間接的方法によっても、一目瞭然に証明されうるであろう。つまり、いまさら説くまでもなく、スターリンが、トロツキー、ジノヴィエフ、ブハーリン等々といった、その思想、才能、性格、背景において、多彩で絢爛豪華たる一騎当千のライバルとの熾烈なる斗いの結果、約三十年の長きにわたって独裁者の地位を保持したのに比し、フルシチョフの政敵とは、カガノヴイッチ、モロトフといった老骨、あるいはマレンコフ、[13]コズロフ、スースロフなどのアパラチキないし事務屋（クラーク）であった。

しかし、フルシチョフが先代の二人のソビエト指導者に比して、その思想ないしパーソナリティにおいて中庸ないし倭小な政治家たることが、ここで仮に承認されえたとしても、なお少くとも次の二つのことがいえよう。

まず、政治指導者の個人的スケールの大小が彼の政治的価値ないし功罪と必ずしも直線的に結びつくわけではない。[14]つまり、小型ないし中庸政治家による中庸政治（ミディオクラシー）が独創的なイデオロギーをもった大器による果断でダイナミックな統治に常に劣るとは、言い難いのである。このことは、どちらのリーダーシップ下においてより良く国民の利益や安寧・幸福が充足・保護されうるかという一尺度をとると最早や一義的即答が躊躇されることからしても、明瞭であろう。さらに言うならば、一般に政治指導者とはすぐれて「環境の産物」[15]あるいは「状況の函数」[16]的側面をもつ存在なのであるが、[17]ソ連邦の場合、一九五〇～六〇年にかけて革命および工業化の成熟期を迎え、現状維持的（ステイタス・クオ）

色彩を帯びるとともに、かつて革命形成期にレーニン、トロッキー、スターリン等に要求されたような類の「創造的リーダーシップ」は最早や時代遅れ（アウト・オブ・デイト）ないし無用の長物化し、むしろ大衆消費段階に突入した時期の国民利益をより良くする「代表的リーダーシップ」が要望されるようになって来たのかも知れないのだ（いわゆる「リーダーシップの質的転換」[18]現象）。こうなってくると、独創的な理論、スローガン、象徴を振りまわす大型政治家よりも、たとえ凡庸であっても国民利益を適確に触知、表出、集約し、忠実に履行するクラーク型のリーダーの方がむしろ重用されてくるのではないか。（このような趨勢が、フルシチョフの後継者たちに至ってさらに顕在化していること、改めて説くまでもない）。

ここでは、右のように問題を提起するだけで、フルシチョフ主義の功罪をレーニン主義あるいはスターリン主義のそれらと比較考証した上価値判断でもって裁く作業そのものは、これをしばし後世の歴史家たちの手中に委ねることにしよう。しかし、つぎに、注目すべきことは、フルシチョフ個人の評価いかんにかかわらず、彼が一九五三年ないし一九五七年[19]から一九六四年にかけて大国ソ連邦の最高政策決定者であったという間紛れもなく否定しようもない歴史的事実の重みである。たしかに、この七～十年は、スターリン治下の三十年と比較するには量的（――ただし、レーニンの在職期間は、スターリンはいうに及ばずフルシチョフのそれよりも更に短かかった！[20]――）のみならず質的にも、色彩の鮮明でない時期だった、と言えよう（尤も、これも比較の問題であって、ブレジネフ＆コスイギン政権と比べれば、フルシチョフ政治は、まだしも「色彩豊かな（colorful）[21]」だった、と評しえよう）。つまり、英国のソ連通ジャーナリストA・ワースの用語を借りるならば、フルシチョフ治下の十年は、正しくは、フル

シチョフ「時代」(epoch) でなくフルシチョフ「段階」(phase) と呼ばれるべき期間であったのかも知れない[22]のだ。けだし、ワースによれば、epoch は、「特徴の極めて明確な、一つの完成したもの」[23]を示唆する語感をもつのにたいし、phase は「はるかに流動的な性質」[24]を表すから、ソビエト指導者中「最も変り易く、最も経験主義的で、また時によりその言動が最も予想しにくい」[25]フルシチョフ支配を表現するにより適切な用語は、前者でなく後者でなければならないからである。

さて、ここで仮に一歩譲って、フルシチョフ主義ないしフルシチョフ時代(エポック)と呼ばれるに値する独自で「特徴の明確な」一貫体系的なものが容易に見出せえないとしよう。[26] しかしながら、この承認は、決して十年近くにわたるフルシチョフ期のもつ諸特徴や傾向性を可能なかぎり客観的鮮明な分析対象とすることの学問的倭小性を意味することにはならない。否、むしろ、その学問的必要性を、逆に促す所以をなすと思われる。不明瞭なるものを幾分でも明確化せんとするドン・キホーテ的盲目性 (?!) でもって、筆者は、以下、この「最も変り易く、最も経験主義的で、また時によりその言動が最も予想しにくい」といわれる時期の中に散見される、なんらかの趨勢ないし動向を、模索、整理する軌軸を提出する作業に取組みたいと思う。大方の批判を乞いたい。

(1) *Правда*, 16 октября, 1964.

(2) フルシチョフ失脚問題のみに焦点を絞った分献として、cf. Martin Page, *The Day Khrushchev Fell.* (New York: Hawthorn Books, Inc., 1965); William Hyland and Richard Wallace Shryock, *The Fall of Khrushchev.* (New York: Funk & Wagnalls, 1968).

（3）たとえば、H・スウィアラーは、「ソビエト発展の構築家（アーキテクト）として、フルシチョフは、二人の先輩のいずれと比較しても、倭小である」と断定している。Howard Swearer, "Bolshevism and the individual leader," *Problems of Communism*. (Vol. XII, No. 2, Mar. — Apr. 1963), p. 93.

（4）E. H. Carr, "Isaac Deutscher: In Memoriam," *1917: Before and After*. (London: Macmillan, 1969), p. 177. 邦訳『ロシア革命の考察』、南塚信吾（東京、みすず書房、一九六九年）、二五〇ページ。

（5）*Ibid.*, p. 177. 邦訳、二五〇ページ。

（6）Isaac Deutscher, "The Failure of Khrushchevism," *Ironies of History: Essays on Contemporary Communism*. (London: Oxford University Press, 1966), p. 121.

（7）*Ibid.*

（8）マルクスの理論が「一般的な指導的諸命題を提供しているだけであって、それらの原理を特殊的には」それぞれの国や時代に応じて、創造的に適用・発展させていかなければならないこと、即ち「創造的マルクス主義」の必要性について、レーニンは、早くも一八九九年につぎのように語っている。「われわれはマルクスの理論を、けっしてなにか完成された、不可侵のものとは考えていない。その反対に、この理論は、社会主義者が生活に立ちおくれたくないならば、今後さらにあらゆる方向に前進させなければならない一つの科学のかなめ石をおいたにすぎないと、われわれは確信している。われわれは、ロシアの社会主義者にとってマルクスの理論を自主的に仕上げることがとくに必要であると考える」（傍点原文）。В. И. Ленин, *Полное собрание сочинений* (издание пятое). (Москва: Политиздат, 1967), Т. IV, стр. 184. 邦訳『レーニン全集』（四版による）（東京、大月書店、第四巻、上、二二六ページ）。

そして、この「創造的マルクス主義」は、爾来、今日にいたるまでソ連の国是となっている。たとえば、「カール・マルクス生誕一五〇年テーゼ」（一九六八年四月）曰く、「В・И・レーニンは、社会主義社会の建設のマルクス主義理論を創造的に

(творчески) 発展させた。*Правда*, 7 апреля, 1968. 現ソビエト・アカデミー会員Φ・コンスタンチーノフも「レーニン主義は現代の哲学である」なる論文中(一九六九年七月)において、レーニン主義が「現代のマルクス主義」、「偉大な創造的学説」であり、且つ現代の情勢下では「さまざまな国の特殊条件のもとで」さらにこの「マルクス・レーニン主義を創造的に(творчески)適用」しなければならないと説いた(傍点—木村)。Ф. Константинов, "Ленинизм-современной эпохи," *Известия*, 10 июля, 1969. 邦訳『今日のソ連邦』(東京・ソビエト社会主義共和国連邦大使館広報課)、一九六九年、八月一五日号、一六ページ。

(9) ソ連問題についての優秀な専門家『ル・モンド』紙のM・タチュは、近年の大著の中で、フルシチョフによる非スターリン化を高く評価して、「非スターリン化という唯一つの理由だけでも、フルシチョフは、歴史上に記憶されるであろう」と、述べた。Michel Tatu, *Power in Kremlin from Khrushchev to Kosygin*, translated by Helen Katel. (New York: Viking Press, 1969), P. 141. ソビエトの一部の知識人は、フルシチョフの功績を高く評価するが、その主たる理由は、やはりフルシチョフの非スターリン化政策である。たとえば、ノーベル賞級といわれるソビエトの秀れた核物理学者A・Д・サハーロフは、一九六八年発表したそのセンセーショナルなパンフレット中で、次のように書いた。「第二〇回ソ連共産党中央委員会でのフルシチョフ氏の『大胆な演説と、これに伴なう一連の施策——幾十万人もの政治犯の釈放と名誉回復、平和共存の原則再建への一歩、民主々義再建への一歩——このすべてがわれわれに、……フルシチョフの歴史的役割をひじょうに高く評価させるのである』。*The New York Times*. (July 22, 1968), p. 15; Andrey D. Sakharov, *Progress, Coexistence, and Intellectual Freedom*. (New York: W. W. Norton & Company, Inc. 1968), P. 55. 邦訳『進歩、平和共存および知的自由』、上甲太郎／大塚寿一(東京、みすず書房、一九六九年)、四六～四七ページ。

(10) フルシチョフの代弁者(マウスピース)Д・イリイチョフも、党は「レーニンが教えたごとく、革命理論を特定時期ならびにその国の具体的な特殊性に創造的に適応(傍点—木村)しなければならぬ、と説き(*Правда*, 19 июня, 1963)、フルシチョフ期におけるその創造的マルクス主義の典型が「全人民国家理論」である、と主張した。つまり、Φ・ブルラツキーによれば、全人民国家理論は、

マルクス・レーニン主義のプロレタリアート独裁にかんする教義を現代の歴史的条件に適応・展開させた」いわゆる創造的マルクス主義なのである。Ф. Бурлацкий, "Вопросы государства в проекте Программы КПСС," *Коммунист*, №. 13, 1961, стр. 44. 邦訳、「ソ連新綱領と国家論の新展開」、(『国際評論』一九六一年十一月号)、一〇ページ。

だが、西側専門家は、全人民国家理論は「マルクス・レーニンの教義と縁もゆかりもない代物」で、したがって同理論にたいして「現代に生きるマルクス主義」としての資格を与ええない、と主張する。Bernard A. Ramundo, "The Soviet State of the Entire People — Non-Marxist 'Living Marxism'," *The George Washington Law Review*. (1963), P. 315.

(11) Deutscher, *op cit.*, p. 121. J・ギルソンも、そのコロンビア大学提出の Ph. D. 論文「ソビエトの未来共産主義社会のイメージ」の中で、フルシチョフ主義の主要点は、事実上全てスターリン時代からの引継きで何らの新奇性をも見出しえない、と結論する。J. Jerome M. Gilson, *The Soviet Image of the Future Communist Society* (Unpublished Ph, D. dissertation, Columbia University, 1965), 逆に、Л・イリイチョフによれば、スターリンこそ、マルクス・レーニン主義になんら大きな貢献をなさず、その「通俗的解説者（популяризатор）」である。Л. Ильичев, "Мощный фактор строительства коммунизма," *Коммунист* (№. 1, 1962), стр. 23. また、スターリンの娘スベトラーナは、新著『わずか一年』(*Only One Year*, 1969) の中で、「スターリンは独創的なことをなんら発明もしなかったし、考えもしなかった」と書いているという。「父スターリンを冷酷に裁く――素晴らしいスベトラーナの新著――」A・アナトール（アナトリー・クズネツォフ）、邦訳、『世界週報』(一九六九年十一月四日号)、五四ページからの引用。

(12) Zbigniew K. Brzezinski, "The Soviet Political System: Transformation or Degeneration," *Problems of Communisim*. (Vol. XVI, Jan, — Feb., 1966), p. 7. ブジェジンスキーは、さらに、故I・ドイッチャーが、スターリンの政敵たるトロツキーにかんして三部からなる伝記すなわち、『武装せる予言者トロツキー、一八七九年～一九二一年』、『武力なき予言者トロツキー、一九二一年～一九二九年』、『追放された予言者トロツキー、一九二九年～一九四〇年』の執筆に精魂を傾けたのにたい

して、誰がフルシチョフのライバルたるマレンコフの伝記を、たとえば『昇進せるアパラチキ、マレンコフ』、『勝利のアパラチキ、マレンコフ』、『養老年金を受けるアパラチキ、マレンコフ』といった具合に書く情熱を有していようかと、スターリンの政敵にたいするフルシチョフのそれの倭小性を痛烈に皮肉っている。*Ibid.*

(13) ただし、スターリンとフルシチョフとの間にみられた夫々の政敵にたいする斗いの進め方にみられる類似性にかんしては、Myron Rush, *The Rise of Khrushchev*. (Washington, D. C.: Public Affairs Press), 1958. 邦訳『ニキタ・フルシチョフ』、安田志郎、(東京、時事通信社、一九五九年); Myron Rush, *Political Succession in the USSR*. (New York: Columbia University Press, 1965) 参照。

(14) かつて丸山真男氏は、「軍事支配者の精神形態」の中で、日本ファシズム指導者たちがナチ指導者と比較して倭小であることを指摘、強調されたが(『現代政治の思想と行動』、東京、未来社、一九五六年、下巻、一〇一～一二二ページ)、これにたいし竹山道雄氏らは、座談会「現代日本の思想」中で、「大胆不敵なナチスであることが優越を示すことであるか否かも、疑問である」等々、と批判された(『自由』、一九六二年、十月号、三七ページ)。

(15) Howard R. Swearer, *The Politics of Succession in the U. S. S. R.—Materials on Khrushchev's Rise to Leadership*—. (Boston: Little, Brown and Company, 1964), p. 7; H. Swearer, "Bolshevism and ...," p. 91.

(16) 高畠通敏「政治的リーダーシップ」、篠原一／永井陽之助編『現代政治学入門』、(東京、有斐閣、一九六五年)、七一ページ。

(17) 元チェコ第一書記ドプチェクの栄光と悲惨を同様の観点からみたものとして、木村汎「チェコ介入の意外性と必然性——介入一周年に思う——」、『社会思想研究』、(東京、社会思想研究会、第二十一巻九号、一九六九年九月号)、一九ページ参照。

(18) 高畠前掲論文、八十一ページ。G・フィツシャーも、フルシチョフが抬頭した一九五〇年代半ばに「ソ連は、近代化(モダナイゼーション)と近代(モディ)との境界線を超え、この転換が新しい型のリーダシップを要請した」と述べている。George Fischer, *The Soviet System and Modern Society*. (New York: Atherton Press, 1968), pp. 7～8.

このように、政治的指導者を「社会的、政治的、経済的要因で説明し」彼の独自なパーソナリティ要因を無視する傾向にたいして常に警告を放っているのは、Robert C. Tucker である。Robert Tucker, *The Soviet Political Mind: Studies in Stalinism and Post-Stalin Change*. (New York: Frederick, A. Praeger, 1963); 'The Dictator and Totalitarianism,' *World Politics*, (XVII, July 1965), pp. 573–574.

そして、この政治的指導者の状況からの拘束性と独立性の問題にアプローチしようとしたものとして、篠原一「現代政治史の方法」、『思想』（四二四号、一九五九年、十月号）一～一二ページ参照。

(19) フルシチョフ政権の開始期をどの時点に求めるかは、かなり厄介な問題である。けだし、フルシチョフの地位は、フルシチョフ自身が意図するとしないとにかかわらず、漸進的強化を遂げたからである。即ち、マレンコフから党第一書記のポストを奪ったのは一九五三年九月であり、つづいてマレンコフの代りに自分の意のままになるブルガーニンを首相に据えたのは一九五五年二月であり、非スターリン化の主役を演じたのは一九五六年二月であり、「反党グループ」のレッテル下にライバルを打倒したのは一九五七年六月であり、ブルガーニンから首相の地位を剝奪し名実共にソ連政治指導者のナンバー・ワンになったのは一九五八年三月のことであった。

(20) Deutscher, *op. cit.*, p. 120.

(21) フルシチョフ失脚後の米国ＷＮＢＣ放送番組「ロシアの新指導者たち」（一九六四年十一月十五日夜）におけるコロンビア大学ロシア研究所々員 Severyn Bialler 氏の発言。Ａ・ユーラムも、フルシチョフ後継者たちが、フルシチョフよりも「さらに色彩の乏しい (less colorful)」ことを、指適している。Adam B. Ulam, *Expansion & Coexistence: The History of Soviet Foreign Policy 1917–67*. (New York: Frederick A. Praeger, 1968), p. 573.

(22) Alexander Werth, *Russia under Khrushchev*. (New York: Hill and Wang, 1962), vi. 邦訳、『変るソ連―フルシチョフが出てから―』、湯浅義正、（東京、岩波書店、一九六三年）、まえがき。Ａ・ワースのこの言葉をよく引用、強調されている日

本人学者としては、高坂正堯氏がある。たとえば、高坂正堯『世界史を創る人びと――現代指導者論――』、（東京、日本経済新聞社、一九六五年）、一〇ページ参照。

(23) Werth, *op. cit.*, vi. 邦訳、同ページ。

(24) *Ibid.* 邦訳、同ページ。

(25) *Ibid.* 邦訳、同ページ。

(26) 以上に反し、フランスのソ連研究家ジョルジュ・フリードマンは、一九五九年に、「いまやこの時期はフルシチョフ時代と呼ばれるにふさわしい」（傍点―木村）と述べたが、原書を入手していないので、この時代がどういう仏語の訳語なのか定かでない。「フルシチョフ時代の現実と可能性」、清水宏五郎編訳、『自由』、（一九六〇年三月号）、三一ページ参照。

第二款　移行期としてのフルシチョフ期

通常よく、フルシチョフ期は、「流動と移行」（ワース）[1]の時期であり、一時的暫定的な「短い中間期（インターレグナム）」（ドイッチャー）[2]である、と説かれている。筆者個人も、原則的に[3]この見解に賛意を表する者である。ただ、それでは、フルシチョフ期が果してなにからなにへの「移行期」（リンデン、コンクェスト）[4]であるかという問題になると、各専門家によってその解答がまちまちであるのみならず、未だ明解で納得のゆく説明が与えられていない現状である。フルシチョフ期がスターリン時代からブレジネフ＝コスイギン期に至る間に位置することは言うを待たないのであるが、まず、スターリン時代の評価が種々の理由で学界で定着しておらない上に、ブレジネフ＝コスイギン期がまだ未知の要素を十二分に含みつつ現在進行中であることからして、フルシチョフ期評価の困難性がさらに招来されて

くるのである。筆者の結論を先に述べることが許されるとするならば、フルシチョフ期は、次の二つの意味において、たしかに過渡期と評価されるべき時期であったように思われる。

(1)　まず、K・マルクスの緊密な協力者たるF・エンゲルスが、文字通りその著『空想より科学へ―社会主義の発展―』の中で、サン・シモン、フーリェ、オーウェン等の説く社会主義を空想社会主義ときめつけ、これにたいしてマルクスおよび自らのそれを科学的社会主義と名付けて前者から峻別しようとしたことは、今さら説くまでもない周知の事実である。[5] ところが、マルクスやエンゲルスとて時代の子、当のエンゲルス自身が右の著書第一版（ドイツ版）に寄せた序文中で認めているように、[6] 右の先覚者たちの影響なしには、自分たちの思想を形成しえなかったのである。[7] つまり、マルクス、エンゲルスは、サン・シモン、フーリェ、オーウェン等のもつ空想的要素を完全に克服しえず、[8] その思想中に多大のユートピアニズムの残滓を止めることになったのである。

マルクス・エンゲルスの理論体系中において、主たる力点が、従来の――とくに資本主義――体制の堕落・矛盾を客観的、冷厳に分析し、したがってその変革の必要性を論証する部分に置かれ、変革が成立した後の社会の青写真提示の部分においては甚だ独創性ならびに具体性を欠く事実が一般に指摘されている。より具体的にいえば、マルクス・エンゲルスは、人間諸悪の源泉が労働の疎外および搾取を可能にする財産制度（＝生産手段の私有）にありとしてこれを廃絶しなければならぬ必然性を極めて唯物的に説く一方において、ひとたびかような生産関係が廃止されたら、人間社会の諸矛盾が解消（精神労働と肉体労働との対立の撤廃、都市と農村との隔差の解消、人間各人の真の平等、等）[9] し、利己心のない個人の「生命の第一欲求」[10] たる労働による物資のあり余る豊かな理想社会

（自由の王国）が現出するかの如き楽観的態度を採っていた。[11] しかし、この自由の王国が到来するためには、マルクスもはっきり述べているように　私有財産のほかに、貨幣、分業もなくなることが前提とされているのであって、その意味で現実的可能性のきわめて薄いいわば一種の希望的観測ないし倫理的要請（ゾルレン）に近い命題なのであった。[12]

もちろん、かような黙示録的未来像を秘めている点こそ、従来多くの人々をマルクス主義思想に惹きつける魅力の一因となっているのであろう。たとえば、チェコスロバキア自由化の旗手たるあのL・ムニャチコですらをして、依然として「それらを実現するやり方に対して、私はいよいよ批判的になって来ている」が「マルクスとレーニンの教えの中に含まれている、あの美しい、ヒューマニスチックな未来への見通しを信じなくなったわけではない」[12]（傍点―木村）と告白させているのだ。[14] だが、その一方において、マルクス主義思想に内包されたユートピア的要素こそ、マルクス、エンゲルスの没後現実に「マルクス主義＝志向国家」[15]を構築、統治、運営してゆかねばならなかったレーニン、スターリン以降ソビエト指導者たちの苦悩とジレンマの正に原因となったものなのである。つまり、彼らは、この始祖たちのユートピア的目標から超脱する実践の度毎に、なんらかの尤もらしい正当化や口実（たとえば、具体的には「悪質なる資本主義的陰謀包囲下に所期の目的の一時的後退を余儀なくされた」等々、そしてそれでもカバーし切れない場合には「マルクス主義の創造的解決により……否々」等）を、造出せねばならなかった。

ところで、概して言うならば、ソビエト指導者たちは、マルクス主義思想中のユートピアニズムを遙か遠く（忘却の彼方？）[16]に設定するか若しくは神棚の奥深く祭り上げたふりをして、その実、ますます政経両面において極めて現実的権力政治および経済利益第一主義を追求してゆこうとする傾向にある、と言える。換言すれば、ソ連邦が

イデオロギー時代の終末に近づいているというのは未だ甚しく早計であろうが、[17] ソ連邦半世紀の歴史は、右のユートピア的幻想からの漸進的解放の過程を辿っている、と言っても間違いなかろう。フルシチョフ期は、この過程における重要な鎖の一環をなす。即ち、フルシチョフは、主として経済政策の分野において　後述するように（――第一節全体をこの詳述に当てる――）、スターリン時代において一部着手されていた物質的刺戟原則をさらに徹底、流線化するなど数々のイデオロギーに促われない大胆な路線を推進したのである。にもかかわらず、フルシチョフ期を、その後に続いたブレジネフ＝コスイギン期と比べる時、依然、マルクス主義的幻想の払拭が十分でなかったこと一目瞭然である。つまり、経済政策の分野における大胆な「脱イデオロギー化」[18]の反面、政治・思想面では、スターリンをすら跳び越して、マルクス、エンゲルスに一挙に立ち戻るような幻想的理論ないし政策（たとえば、全人民国家論、農村都市（アグロコロド）構築案、その他一九六〇年党綱領に典型的に見られる「一九七〇年までに一人あたり生産量で米国を追い越し、一九八〇年には共産主義の門口に立つ」[19]等の仰々しい大言壮言[20]）が臆面もなく宣明されたのだった。

このような現実主義とユートピアニズムとの奇妙な混淆――これこそ、フルシチョフニズムの観察者を途惑わせ、その一義的性格づけを孤疑逡巡させる「曖昧さ（アムビギュイティ）」[21]（ドイツチャー）の主因であろう。ブレジネフ＝コスイギン & Co. 期になると、別稿[22]で詳述するごとく、このうち、ユートピア的ヴァニティが恥も外聞もなく一掃され、手固く合理的な現実化路線の徹底化（あるいは、エコノミック・アニマル化）が、――もっとも、内・外政治上の強硬路線という代償付きではあるが――一路推進されてゆくのである。以上の意味で、フルシチョフ政権は、まず移行期であ

る。

(2) 古来から政治支配手段の「理念型」として「飴」と「鞭」(あるいは、「人参(キャロット)」と「杖(スティック)」)の二大別が知られているが、これは余りにも大ザッパすぎるとして、さらに、(i)物理的暴力による強制、(ii)心理的暴力による強制、(iii)価値剝奪による強制、(iv)報奨による説得、(v)伝統的慣習による説得、(vi)合理的説得による説得、の六つに細分する学者もいる。[23] ところで、こゝでの筆者の用途のためには、この中間をとって、(a)物理的強制、(b)物質的報償、(c)精神的説得の三つで充分であると思われる。いかなる政治体制も、程度の差こそあれ、常にこの三つの手段に依存しているのであって、[24] このうち一つないし二つのみに依拠する限界政治権力は、現実上存在しえないことも、政治学の常識となっている。

さて、ソビエト政治権力とて、右の原則の例外をなすものではないが、ここで筆者の関心を惹くのは、スターリン時代とフルシチョフ期とを比較観察する時、この三手段にたいする依存度の変化具合である。理由は後に詳述するが(第二節、第三款)、フルシチョフ期になると、スターリン時代と比べて、統治、経営等の分野の差異を問わず、一般的にいって、右の三手段のうち、ますます、(a)に頼ることがむつかしく、その分だけ前より一層(b)と(c)の手段に依拠する度合が増大せねばならなかった、と結論してまず間違いなかろう。たとえば、この変化を、L・グルリオ(米国)は、次のような簡単な算術によって巧みに説明した。

「ソビエト体制は、その異なった時期に応じて夫々にたいする依存度は異なるが、つねに、三つの要素——強制、インセンティヴ、説得——に依存している。もし、スターリンの強制キャンプが後退すれば、消費物資という形で

のインセンティヴが提供されねばならないのみならず、宣伝も効果的なものにならねばならない。これが、フルシチョフの政策となったのである」[25]。

これを、従来の著者の分脈（コンテキスト）即ち「移行期としてのフルシチョフ期」に関連づけて言い直すならば、次のように言いうるであろう。つまり、フルシチョフ期は、スターリン的「強制」から「報償」へ（F・バグホーンの言葉を借りれば「テロという消極的インセンティヴ」から「報償という積極的インセンティヴ・パターン」へ）[26]と大幅に力点を移動させた時期ではあったが、依然として、「強制」や「報償」から「説得」の社会へとは移行しえず、而も、「説得社会」への黙示録的ゴールを捨て切れず、このゴールへの公約やジェスチャーだけは仰々しく行なった時期であった、と。

（1）Werth, *op. cit.*, v. 邦訳まえがき。

（2）Isaac Deutscher, "The Khrushchev Interregnum," in *The Great Contest: Russia and the West.* (New York: Ballantine Books, 1961), p. 39. 邦訳『大いなる競争—ソ連と西側—』、山西英一、（東京、岩波書店、一九六一年）、三一ページ。

（3）これにたいして、T・スザミュルイは、スターリン以後現在（一九六九年）に至るまでの全時期（すなわち、フルシチョフ期＋ブレジネフ・コスイギン期）を一つの移行期と見る見解、あるいは寧ろ逆に、スターリン時代こそ、初期の革命時代と現代ソビエト期との間に横たわる移行期と考える見解を提示している。誠に示唆あふれる仮説と思うが、ここでは一応通説にしたがう。Tibor Szamuely, "Five Years After Khrushchev," *Survey.* (No. 72, Summer, 1969), p. 52, 59. けだし、F・バグホーンも「全ポスト・スターリン期を一つの単位と看做すことも可能であろう」と述べた直後、但し書きをつけたように、しかしながら、このことにより、「フルシチョフの移り気で楽天的な『人民主義』が、ビジネス・ライクで自称科学的でク

ソ真面目で改良主義的な後継者たちによって取って替られたために生じた諸変化」に「無関心」であってはならないからである。Frederick C. Barghoorn, "Prospects for Soviet Political Development: Evolution, Decay, or Revolution?" *The Soviet Union: A Half-Century of Communism.* (Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins Press, 1968), p. 83.

(4) C・リンデンも「フルシチョフ期はソビエト政治における移行期であり、フルシチョフは一時的指導者と目されうる」(傍点—木村)と述べている。Carl A. Linden, *Khrushchev and the Soviet Leadership: 1957-1964.* (Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins Press, 1966), p. 208. 英国の詩人兼クレムリノロジストのR・コンクエストも、フルシチョフ統治下の一九六三年に「ソ連が現在移行期にあることは、衆目の一致するところである。何からの移行かということは明々白々であるが、この移行期の後に何が来るかに関しては種々の見解があろう」と書いた。Robert Conquest, "After Khrushchev: A Conservative Restoration?" *Problems of Communism.* (No. 5, Sep.-Oct. 1963), p. 41.

(5) この点は、ソ連邦において、今日に至るまで疑うべからざる「真実」とされている。たとえば、現ブレジネフ・コスイギン & Co. のイデオローグ以上の存在たるM・A・スースロフは、マルクス生誕一五〇周年記念報告演説中にて、「マルクスは社会主義を空想から科学に変え」(傍点—原文どおり)た、と称讃した。*Правда,* 6 мая, 1968.

(6) Karl Marx・Friedrich Engels, *Werke.* (Berlin: Dietz Verlag, band 19, 1962), S. 188. 邦訳『空想より科学へ—社会主義の発展—』、大内兵衛、(東京、岩波書店、一九四六年)、十二ページ。

(7) フルシチョフ治下のソビエト学者も、「社会主義—ユートピア主義者の共産主義思想発展における功績が甚大なる事実」を、承認している。Ю. Арбатов, *Что Такое Коммунизм.* (Москва: Госуполитиздат, 1960), стр. 5.

(8) 否むしろ「マルクスのヴィジョンの方が、空想的社会主義者の称号を奉てまつられているサン・シモンのそれと比べてより現実性が少い (less realistic)」と主張する、アメリカの政治学者すら存在する。Erich Goldhagen, "The Glorious Future: Realities and Chimeras," *Russia Under Khrushchev: An Anthology from Problems of Communism,* edited by Abraham

Brumberg. (New York: Friedrich A. Praeger, 1962), p. 625.

(9) ロシアのアナーキストたるクロポトキンも、都市と農村との分化ならびに精神労働と肉体労働との間の分業をなくしてしまえる、と考えていた。猪木正道／勝田吉太郎編『世界の名著、プルードン・バクーニン・クロポトキン』(東京、中央公論社、一九六七年)、五〇ページ。ついでながら、フルシチョフ失脚後発行された『国家と法にかんする一般理論』(一九六八年)によっても、未来共産主義社会を特色づけるポイントとしては、相も変らずマルクス以来のイメージが忠実に踏襲されて、それを抜きんでるような特徴が見出されるわけではない。すなわち、そこで列挙されているのは、(i)物質的豊饒、(ii)単一の共産主義社会的財産所有、(iii)都市と農村の隔差解消、(iv)精神労働と肉体労働の差別消滅、(v)労働者、農民の差別全廃、(vi)生命の第一欲求としての労働、(vii)必要に応じての分配、(viii)国家と法の消滅、である。*Общая теория государства и права.* (Ленинград: Издательство ленинградского университета, 1968), Т. I, стр. 292. したがって、共産主義社会の未来像にかんするかぎり、マルクス以来現ブレジネフ時代にいたるまで、なんら注目に値するような創造的展開はない、といって過言でなかろう。ことに、フルシチョフの共産主義理論の主要点は実際上全てスターリンのそれの焼き直しに過ぎない、と喝破する者もいる。Gilson, *op. cit.*, p. 254 (前款註(11) 参照。

(10) Karl Marx・Friedrich Engels, *Werke.* band 19, S. 22. 邦訳『ゴーダ綱領批判／エルフルト綱領批判』(東京、大月書店国民文庫)、四五ページ。

(11) *Ibid.* 邦訳四五ページ。

(12) 勝田吉太郎「アナーキズムの復活」〈5〉『毎日新聞』、(一九六九年六月十八日)。

(13) ムニャチコ、『遅れたレポート』、栗栖継訳(東京、勁草書房、一九六六年)、六ページ。

(14) 米国に亡命したスターリンの娘スベトラーナ・アリリュエバも、一九六九年NBCテレビ番組「ミート・ザ・プレス」中で、米人記者のインタービューに答えて、つぎのように述べた。「ある時期、共産主義は世界の多くの人々を魅了しました。

それは共産主義が民衆にある種の約束を与えていたからです。そんな約束が実現するはずがないというのも知らずに、人々は頭から信じ込んでしまいました。もっとあとになってやっとこれに気がつくのです。」スベトラーナ・アリルーエバ、「ロシアの悪夢もいつかは終わる」、『世界週報』(東京、時事通信社、一九六九年十一月四日号)、四七ページ。

(15) John N. Hazard (コロンビア大学政治学部教授) の造語を借用した。

(16) cf. Alexander Gerschenkron, "On Dictatorship," *The New York Review*. (June 19, 1969), p. 4.

(17) Merle Fainsod, *How Russia is Ruled* (Revised edition). (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1963), p. 595. 邦訳『ソ連の統治形態』(下)、井上勇、(東京、時事通信社、一九六九年)、一四四ページ。cf. Daniel Bell, *The End of Ideology: On the Exhaustion of Political Ideas in Fifties*. (New York: The Macmillan Company, 1960), 邦訳『イデオロギーの終焉—一九五〇年代における政治思想の涸渇について—』、岡田直之、(東京、東京創元新社) 参照。

(18) Tibor Szamuely, "Five Years After Khrushchev," *Survey*. (No. 72, Summer 1969). p. 57. タチュは、「フルシチョフは、常にイデオロギー論争よりも寧ろ『共産主義建設の現実的課題』に取組むことを望んだ」、とズバリ明言し (Tatu, *op. cit.*, p. 338)、C・P・キャベルも、フルシチョフが「実際的な人で、イデオロギーより現実を尊重する傾向があった」と書いた。

(19) *Программа коммунистической партии советского союза*. (Москва, Политиздат, 1961), стр. 65. 邦訳、『共産党新綱領』、長山頼正編、(東京、時事通信社、一九六一年)、八五ページ。『ソビエト連邦共産党綱領』、ノーボスチ通信社訳、(東京、駿台社、一九六二年)、六九ページ。ところが、このソ連が一九七〇年までに米国までに米国に「追いつき追い越す」というフルシチョフの青写真を、ソビエト市民自身が最初から信用していなかった、といわれる。たとえば、堀健三「反体制運動にゆらぐソ連」、『諸君』、(一九六九年、十一月号)、二〇七ページ。Sakharov, *op. cit.*, pp. 142-143. 邦訳、一二六～七ページ参照。そして、F・バグホーンによれば、一九八〇年までにロシアが到達する生活水準は、「フーバー」時代のそれであり、

その時十五〜二十年後に「アイゼンハワー時代」の水準であろう、という。Barghoorn, "Prospects……", p. 89.

(20) *Правда*, 17 октября, 1964.

(21) Deutscher, *The Great Contest*, p. 36. 邦訳二九ページ。

(22) 『法学論叢』ないし『スラブ研究』他に（一九七〇—一）に、一〜三回に分けて執筆予定。

(23) 猪木正道『政治学新講』（京都、有信堂、一九五六年）、一二三〜一三四ページ。

(24) Franz L. Neumann, "Approaches to the Study of Political Power," *Political Science Quarterly*, (Vol.LXV, No. 2, June, 1950), p. 168.

(25) *Christian Science Monitor*, June 6, 1967. グルリオ引用句中にも明らかなように、スターリンの強制キャンプは「後退」したが、廃絶された訳でないことは言うまでもない。強制キャンプの「後退」の度合如何にかんしては、信頼しうべき資料が実に入手困難なのであるが、一参考として、ソ連邦副検事総長П・И・ワドリャフツェフは、一九五七年五月、ハーバード大学H・バーマン教授のインタビューに答えて、当時既に三分の二の強制キャンプが閉鎖・廃止された旨述べたという。Robert Conquest, *The Great Terror: Stalin's Purge of the Thirties*. (London: The Macmillan Company, 1968), p. 515.

(26) Frederick C. Barghoon, "Prospects for Soviet Political Development," *The Soviet Union: A Half Century of Communism* edited by Kurt London. (Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins Press, 1968), p. 95.

第三款　方法論について

最後に、本稿の方法論上の問題について一言して、この異例に長くなった序文を終えたいと思う。右のように、ソ連社会が、ごく大ざっぱに言って、スターリン時代からフルシチョフ期に移行するにつれ「強制」的手段により

少く頼りその分だけより多く「物質的刺戟」に依存せねばならなくなったということは、一般にいかなる近代社会の工業化進展途上に見出される普遍的現象であって[1]、なんら特殊ソビエト的現象と主張しえない事柄であろう。W・W・ロストフ流にいえば、ソ連社会も「離陸期（テイク・オフ）」を経て「成熟期」ないし「高度消費時代」に突入しつつあるのであり、G・フイッシャー流に言えば、ロシアは、一九五〇年半ばに「近代化（モダナイゼーション）」を終え「近代社会（モダニティ）」に参加したのであろう。[2]

もっとも、それだからといって、「共産主義とは、所詮、後進国が急速に上から工業化を進行せんとする際の手段にすぎない」[3]とか、「ソ連工業化の型が、他のたとえば、資本主義国のそれと全く比較可能（コンパラブル）である」[4]とか、果ては最近流行の両体制収斂理論[5]に、一足飛びに跳びつくわけではない。だが、西側のソ連研究のアプローチにかんしていえば、主としてスターリン時代を対象として開発された所請「全体主義的」[6]モデルが、スターリン没後全体主義の「水割り」[7]ないし「雪融け」現象を示しはじめたソ連社会の分析用具としては最早や時代遅れのものとなり、これに代る有効な概念を早急に造出する必要に迫られていることは[8]、疑いえない事実である。

このいわば焦眉の急に迫った要請に答える代案作製に、今のところ（――一九六〇年頃から――）一番熱心なのは、米国の少壮社会科学者たちであるといえよう[9]。たとえば、前記W・W・ロストフ教授の他、C・ブラック教授[10]、R・ダニエル教授[11]、J・カウツキー教授[12]らは、まず原則的に近代化ないし工業化の一変種としてロシア共産型を把握し、次にこれと他の型との異同点を検討する立場にたっている。また、Z・ブジェジンスキー、S・ハンテントン両教授[13]、F・バグホーン教授[14]、S・P・ジュヴラー、H・モートン両教授らは[15]、機能的なアプローチを採れば体

制の差を越えた比較研究が可能な筈だという立場から、社会化、政治教育、世論の形成操作、エリートの補充、政策決定[16]、政策履行、等の過程の実証的研究に取組んでいる。さらに、筆者個人についていえば、曽って、A・インケルス教授の三つのモデル、即ち、「全体主義 (totalitarian) モデル」、「発展 (development) モデル」、「工業化 (industrial) モデル[17]」に啓発されて、一般的にスターリン期をも含めてソビエト政治の分析用具として、「イデオロギー・権力＝志向モデル」ならびに「非イデオロギー・経済＝志向モデル」の二つを併用することを唱えたこともあったが[18]、スターリン後のソビエト社会の分析概念としては、最近とみにA・カソフ教授の「管理社会――テロなき全体主義社会――[19]」が最も有効であると確信しはじめており、本稿でも、この概念の有効性を、テストしてみるつもりである。

では、抽象的な先走りの要約はもうこの位にして、いよいよ、次にこれまで述べ来たったフルシチョフ期の二面性を具体的に例証する作業に移ろう。

(1) Solomon M. Schwarz, "Why the Changes?" Brumberg, *op. cit.*, p. 595. ハルトおよびC・モーディヒも、ソビエトの統計数学を用いて、「一九五五年までに、ソビエト経済発展の基礎 (basic) 段階が終了した」と結論して良い、と述べる。John P. Hardt and Carl Modig, "Stalinist Industrial Development in Soviet Russia," *The Soviet Union...*, edited by London, p. 303.

(2) Fischer, *op. cit.*, p. 8.

(3) 例えば、cf. John H. Kautsky, "An essay in the Politics of Development," *Political Change in Underdeveloped Countries*. edited by Kautsky (New York: John Wiley and Sons, Inc., 1963), pp. 3–122; John H. Kautsky, *Communism*

and the Politics of Development: Persistent Myths and Changing Behavior. (New York: John Wiley and Sons, Inc, 1968), pp. 1～6; Robert V. Daniels, *The Nature of Communism*. (New York: Vintage Russian Library, 1963), pp. 245–281.

(4) たとえば、cf. Cyril E. Black, "Soviet Political Life Today," *Foreign Affairs*. (Vol. 36, No. 4, July, 1958), pp. 579–581; Introduction and Conclusion of *Political Modernization in Japan and Turkey*, edited by Robert E. Ward and Dankwart A. Rustow (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1964), pp. 3–13, 434–468.

(5) 所謂「コンヴァージェンス」論の文献としては、J. Tinbergen, H. Linnemann, J. P. Pronk, "The Meeting of the Twain," *Columbia Journal of World Business*. (Summer 1966), pp. 139～149; Bertram Wolfe, "Russia and the U. S. A.:A Challenge to the Convergence Theory," *The Humanist*. (Sep.–Oct. 1968), pp. 3–10, 32; Wolfe, "Bertram Wolfe Replies to His Critics," *The Humanist*. (Nov.–Dec. 1968), pp. 26–27; Richard Rockingham Gill, "A Case for Economic Convergence," *Studies in Comparative Communism*. (Vol. 2, No. 2, April 1969), pp. 34–47; 高橋浄、「二つの社会・経済体制の収斂論—比較経済体制論への一視角—」、『共産圏問題』(第十二巻第十二号、一九六八年十二月)、一九—五〇ページ。『東西両体制の変貌』(東京、欧亜協会、一九六九年)。E・モドルジンスカヤ、「〝進化論〟のかげにかくれた反共主義の説教」(『国際生活』、一九六九年第一号)、邦訳、『プラハ—'69』(東京、新時代社、一九六九年)、七三—九六ページ。*The New York Timss* (July 22, 1968), p. 16; Sakharov, *op. cit.*, p. 76～79. 邦訳、六四～六九ページ。およびこれらに挙げられている諸文献参照。

(6) 「全体主義的」アプローチの代表、先駆的書物と目されているのはいうまでもなく、Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism* (New York: The World Publishing Company, 1956); Carl Friedrich and Zbigniew K. Brzezinski, *Totalitarian Dictatorship and Autocracy* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1956) であり、この二著の影響・刺激のもとに、Bertram D. Wolfe, *Communist Totalitarianism: Keys to the Soviet System* (Boston: Beacon Press, 1956);

John A. Armstrong, *The Politics of Totalitarianism.* (New York: Randam House, 1961); Adam Ulam, *The New Face of Soviet Totalitarianism.* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1963); *Totalitarianism.* edited by Carl J. Friedrich, (New York: Grosset & Dunlap, 1964). が発表された。

(七) Robert Burrowes, "Totalitarianism," *World Politics.* (Vol. XXI, No. 2, Jan., 1969), p. 288.

(八) 「全体主義」モデルの有効性を否定ないし疑問視するものとして、後述の他、Robert. C. Tucker, "The Dictators and Totalitarianism," *World Politics.* (XXII, July 1965), pp. 555～583; "Towards a Comparative Politics of Movement—Regimes," *The American Political Science Review.* (LV, June 1961), 281～289; H. Gordon Skilling, "Interest Groups and Communist Groups," *World Politics.* (XVIII, April 1966), pp. 435–451; Alexander J. Groth, "The 'isms" in totalitarianism, *The American Political Science Review* (LVIII, Dec. 1964), pp. 888–901; Alfred G. Meyer, *The Soviet Political System: An Interpretation.* (New York: Random House, Inc.), 1965, pp. 470–471. が挙げられる。なお、Hugh Seton-Watson, 'Totalitarianism Reconsidered," *Problem of Communism.* (Vol. XVI, No. 4, July–August, 1967), pp. 53–58.

(九) たとえば、Preface to *Soviet Policy-Making: Studies of Communism in Transition*, edited by Peter H. Juviler & Henry W. Morton (New York: Frederick A. Praeger, 1967), v–xi; Symposium with John A. Armstrong, Alfred G. Meyer, John H. Kautsky et al. *Slavic Review.* (Vol. XXVI, No. 1, Mar. 1967), pp. 1–28; Alex Inkeles, "Models and Issues in the Analysis of Soviet Society," *Survey.* (No. 60, July 1966), pp. 3–7; Robert C.Tucker, "Toward A Comparative Politics of Movement-Regimes," *The American Political Science Review.* (LV, June 1961), pp. 281–289.

(一〇) Black, *op. cit.*; *The Dynamics of Modernization: A Study in Comparative History* (New York: Harper & Row, 1967). 邦訳『近代化のダイナミックス—歴史の比較研究—』、内山秀夫／石川一雄（東京、慶応通信、一九六八年）。

(一一) Daniels, *op. cit.*

(12) Kautsky, *op. cit.*

(13) Zbigniew K. Brzezinski and Samuel P. Huntington, *Political Power: USA/USSR* (New York: The Viking Press, 1963).

(14) Frederick C. Barghoorn, *Politics in the USSR.* (Boston: Little, Brown and Company, 1966).

(15) Juviler & Morton, *op. cit.*

(16) ソビエト政策決定過程に鋭いメスを入れようとした初の具体的（フルシチョフ下の農業問題にかんする）労作としては、Sidney Ploss, *Conflict and Decision-Making in Soviet Russia: A Case Study of Agricultural Policy, 1953–63.* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1965) がある。

(17) Inkeles, *op. cit.*, pp. 3–17. A・インケルス教授にかんしていえば、氏は、「全体主義」アプローチに「工業化」アプローチを併用することを、永年考えて来られたようである。cf. Alex Inkeles and Raymond A. Bauer, *The Soviet Citizen: Daily Life in a totalitarian Society* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1959), pp. 383–4; 前掲 Symposium 参照。

(18) Hiroshi Kimura, "Personal Property in the Soviet Union, with Particular Emphasis of the Khrushchev Era: An Ideological, Political and Economical Dilemma, (I)"『スラブ研究』(北海道大学、一三号、一九六九年)、pp. 54–55.

(19) Allen Kassof, "The Administered Society: Totalitarianism Without Terror," *World Politics.* (XVI, July, 1964), pp. 558–575. その他、興味ある示唆的な提案として「近代的独裁」(Burrowes, *op. cit.*, p. 294)、「複数エリート主義」(Skilling, *op. cit.*, p. 449)、「全体的官僚主義」(Meyer, *op. cit.*, p. 472)、がある。

第二節　「強制」から「報償」へ

――現実化の途――

おれは魂を抹殺し、物について叫ぶ、社会主義に不可欠な物について。

……

昔の権力者のくらしよりもわるいくらしはしたくない。

……

うちはもともと貧乏だから、ぬかるみで這いつくばるのはもう飽きた。すこしでも高い所で暮したい。

……

要するに新らしい社会関係のための物質的基盤をよこせ。

……

おれは魂を抹殺し、物について叫ぶ、社会主義に不可欠な物について。

――マヤコフスキー「物質的基盤をよこせ！」（一九二九年）[1]より――

第一款　フルシチョフのグラーシ共産主義[2]

一、物質的刺戟強化の大構想（グランド・デザイン）[3]

物質のあり余る豊かな社会――これは、マルクス以来すべての共産主義者が描いてきた未来共産主義社会の中心的地位を占める要件であった。[4] けだし、そこにおいてこそ初めて、各人は社会総生産物の頒け前を自由に「必要に応じて」[5] 得ることができ、真の平等が可能となるだろうからである。ただ、そのような状態が近い将来の地上に招来するとは、フルシチョフ以外、いかなる共産主義者も未だ曾って宣明しなかったのである。ここに、フルシチョフ（もしくはフルシチョフ期）のユニーク性が求められる。

マルクスは、既存のブルジョワ的財産権秩序のプロレタリアート階級による一挙暴力的廃止を目指すプロレタリアート革命を唱導したが、この革命後直ちに「各人の必要に応じて」物質が分配される共産主義社会が成就される訳でない、との但し書きをつけるのを忘れなかった。[6] つまり、マルクスによれば、社会主義社会は「資本主義社会から生れたばかり」[7] で、あらゆる点で（経済的にも道徳的にも精神的にも）「それがうまれでてきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている」[8] ので、「各人の働きに応じて」の分配方式を一挙に排除してしまい得ないのである。これが「欠陥（Mißstand）」であることをマルクスも卒直に承認するが、[9] それは共産主義の第一段階では「避けることのできない（unvermeidbar）」[10] 欠陥であり、これが克服され、「各人がその必要に応じて」受けとる分配形式は、すべての物質的・精神的条件が整った「共産主義のより高度の段階」をまってはじめて可能になる、と説いた。[11] 次に、レーニンは、このマルクスのいう共産主義社会の「第一段階（die erste Phase）」と「より高度の段階」（die höhere Phase）」とを、夫々、やや強引・恣意的に[12]「社会主義（социализм）」と「共産主義（коммунизм）」と名付けてしまい、[13] 両者の間には長いプロレタリアート独裁国家の期間が必要であることを正当化した。（レーニン）曰く、「資

本主義を打倒したのちに、人々が何らの権利の基準もなしに社会のために働くことをただちに学ぶなどと考えることは、空想的にでも陥らなければできないことであり、しかも、資本主義の廃止はこのような変化の経済的諸前提を一挙に与えるものでもない」[14]。したがって、共産主義の「高度の」段階が到来するまでは、「社会主義者は、労働の基準と消費の基準に対する社会の側からと国家の側からのきわめて厳格な統制を要求し」、「この統制は、資本家の収奪から、資本家に対する労働者の統制からまず開始されなければならず、しかもこの統制は、……武装した労働者の国家によって遂行されなければならないのである。」（傍点原文）スターリンは、資本家、地主等の敵対階級の絶滅に成功することにより、一九三〇年初頭、レーニンの定義による「社会主義」を達成したと宣言した。しかるに、レーニン流によるマルクス主義の解釈によれば、階級抑圧手段と定義された国家機構が敵対階級消滅後も引続き存在する――存続するどころか益々強化・肥大化する――矛盾を、弁明しなければならなかった。スターリンは、これを、彼独自の詭弁（？）で、つぎのように説明しようとした。

「われわれは、国家の死滅を希うものである。しかし、同時に、かつて存在した全ての統治権力の中で最強のプロレタリアート独裁の強化にも、与みするものである。国家権力の死滅を準備するために、国家権力を最大限に発展させること――これこそマルクス主義的公式である。これは、「矛盾」だろうか？　然り、「矛盾」である。しかし、これこそ、人生であり、マルクス主義弁証法を完全に反映しているのだ」[16]

他方、スターリンは、一九三〇年代の工業化「離陸期（テイク・オフ）」および一九四〇年にかけての「大祖国戦争」を完遂するために、物質的豊かさを現在とは程遠い未来[17]の目標に設定し、それを達成するにはかなり永きにわたる厳しい犠牲が

必要である、と国民に説いたのである。[18]

(1) このように、歴代の共産主義者たちは、物質的豊かさの概念を、共産主義社会の最重要要件としながらも、未だその実現の必要性も可能性も真執な思索の対象に入れていなかった、といって良いであろう。その証拠に、彼らがこの概念を口にする時、きまって共産主義の他のメルクマール（平等、精神的豊かさ、等々）にも同時にリップ・サービスすることを忘れず、又その実現のための前提条件の困難さを但し書きにするのを忘れないのであった。したがって、H・C・フルシチョフが、このような趨勢の中にあって、その理由、動機、背景の如何を問わず（――この点は、次号にて取扱う――）、①「物質的豊かさ（изобилие あるいは изобилие материальных благ）」こそ、共産主義の不可欠要件ないし最大目標（ゴール）そのものたること、そして②これは遠い未来においてではなく近いヴィズィブルな将来に実現可能であること、――この二点を、なんらのテライもなく真正面から堂々と主張した点において、ソ連指導者中ユニークな座を占める、といわざるをえない。ソビエト学者B・Φ・マイエルは、一九六三年、フルシチョフの音頭とりの下に成立した『党綱領』を、物質的豊かさを追求する共産主義の伝統の中で、つぎのように意義づけた。

「共産主義的分配への必要欠くべからざる要件としての豊かさの問題は、原則的には、K・マルクス、Φ・エンゲルス、そして後にB・И・レーニンの諸著作によって基礎をおかれたのである。しかし、ソ連共産党第二十二回党大会採択になる『新綱領』をまって、初めて、特定の歴史的条件に合致した豊かさの具体的内容が、定義づけられたのである」（傍点―木村）[19]

指摘するまでもなく、右の引用句中、「具体的（конкретное）」[20]の一語は、最重要である。つまり、かつての未来共産社会のヴィジョンの内容や時間表は甚だ曖昧模然としていた――また、その故にこそ、政権奪取後も長期にわたって幅広い支持層を獲得し革命運動のダイナミックスを継続しつづける原動力となりえていたのであるが――のに比し、今度は、永年にわたる革命の福音書的熱情と黙示録的期待に疲れ果てたソビエト国民が、未来ユートピアの具体的細目ならびにその実現の時間表の公開を要求しはじめ、このような要請を素早く敏感に察知対応しようとして、他ならぬフルシチョフ路線が生み出されて来たのである。その結果、フルシチョフ主義とは、経済主義（エコノミズム）、修正主義、グラーシ共産主義、はては資本主義の復活と同義語であるとの批判を、国の内外に招くことになった。

まず、フルシチョフは、共産主義と物質的豊饒のイメージとだぶらせてみせた。たとえば、一九六三年、「なぜ、わが党は、共産主義社会建設と物質的・文化的豊かさの達成とを関連させるのか？」と自問し、つぎのような明解な答えを与えている。

「低生活水準と禁欲に甘んじた初期キリスト教の共同体精神中の平等の教えは、科学的共産主義に無縁のものである。共産主義は、『意識が高く』『きわめて平等』な人々を遇するのに、空の皿の並ぶ食卓と想像されてはならない。そのような『共産主義』へ人々を招ずることは、錐（きり）でミルクを飲めというに等しい（場内ざわめく）。これは、共産主義の戯画（カリカツーラ）いがいの何ものでもなかろう。」[21]

フルシチョフによる同種の発言は枚挙にこと欠かないが、[22]一九六四年四月のブダペスト（ハンガリー首都）演説は、「フルシチョフ・グラーシ共産主義」[23]の呼称をあまねく全世界に喧伝する端緒となった意味で、やはり引用に値い

するであろう。即ち、フルシチョフは、「もし、社会主義体制が人々に資本主義よりも少い経済的・文化的富を与えるならば、『一位全体なんだって、一つの体制を別のそれへと代えたのか？』と問う人々もでてくるであろう」[24]と述べ、「労働者階級、勤労者たちが革命に立ち上ったのは、……彼らが以前より良い生活、即ち精神的・物質的欲求が充たされることを欲したからに他ならない」[25]と答えた。そして、『新党綱領』の唱い文句は、「一九七〇年までに、国民一人あたりの生産高で、もっとも強大で豊かな資本主義国―アメリカ合衆国―を追い越す」[62]というのであった。[27]

さて、ここで、フルシチョフが、物質的豊かさを、共産主義の目標（ゴール）そのものと考えたか、あるいは共産主義達成の前提条件の一つと看做したか、の詮索はさして重要ではない。[28]まず、個人の真の動機をつきとめることは本人自身にとってすら不可能事に近いことである上に、機を見るに敏で狡智なポリティシャンであるのみならず歴代のソビエト指導者中最大の気分屋だったフルシチョフは、時と場所に応じて異なった発言を残しているからである。[29]たとえば、一九六二年四月二十六日、著名なアメリカ出版業者ガードナー・カウルズに向って「共産主義とは、われわれの理解によれば、物質的豊かさのことである」といともアッサリ言ってのけるかと思えば、[30]一九六〇年四月二日フランスTV演説中においては、「共産主義とは、自由、平等、博愛の真の実現のことである」[31]と、如何にもフランス革命の国向けに、共産主義のイメージ・チェンジを、朝食前の芸当でやってのけている。[32]したがって、筆者のここでの意図は、物質的豊かさが、フルシチョフ期において、共産主義建設の不可欠前提条件ないし時としては共産主義の目標そのものと同等視された事実、そしてこの「共産主義」が「物質的豊かさ」へとイメージ・チェンジを遂げたことは、かつてアメリカにおいて大衆の革命的反抗のシンボルであった「デモクラシー」が今日では「ア

メリカ的生活様式（ウエイ・オブ・ライフ）」に意味転換を遂げた如く、[33]一つの理念やイデオロギーが外形的普遍性を飽く迄維持しようとする際に屢々見られる現象たること、を指摘すれば足る。

(2) それでは、つぎに、この「物質的豊かさ」はいかにして達成されうるのか。フルシチョフによる物質的豊饒達成の構想を見てみよう。そのためには、一九六一年フルシチョフの音頭とりのもとにフルシチョフ路線の決定版として提示採択された『共産党新綱領』を、まず一瞥する必要がある。けだし、この綱領は、現ブレジネフ＝コスイギン政権下においてこそ事実上反古にされているのであるが、[34]フルシチョフ政権下にあっては、当時「ソビエト市民の公共生活の辞典（エンツィクロペディア）」であるのみならず、[35]「近づきつつある共産主義社会の、近似的でなく完全に精確で科学的な未来図を与える」[36]（Π・イリイチョフ）青写真であると目され、その意味で、われわれがフルシチョフ路線を語るさい何よりも先ず手引としなければならない最重要書類だからである。フルシチョフは、『新党綱領』を招介・説明するにさいして、レーニンがかつて「われわれの党綱領は、たんなる党綱領にとどまっているわけにはいかない。それは、われわれの経済建設の綱領に転化しなければならないし、もしそうでなければ、それは党綱領としてもなんの役にもたたないのである」[37]（傍点―木村）と述べたことを強調しているが、[38]フルシチョフが一九六一年『綱領』で描いてみせた共産主義の経済建設構想の要点は、ほぼ次のようなものであった。

「共産主義建設の課題の解決は、順序立った段階をへて行なわれるのである。

今後の十年間（一九六一～一九七〇年）に、ソ連は共産主義の物質的・技術的基盤をつくりながら、人口一人あたりの生産物の生産において、最も強力で、豊かな資本主義国―アメリカ合衆国を凌駕するであろう。勤労者

の物質的福祉、文化・技術的水準が著るしく高まり、すべての人に物質的豊かさが保障されるだろう。……

第二の十年間（一九七一年〜八〇年）の結果として、全住民に対して潤沢な物質的・文化的欲求を保障する共産主義の物質的基盤が作られ……るだろう。（傍点―木村）……

党およびソビエト国民の主要な経済上の任務は、二十年間に共産主義の物質的・技術的基盤を造りあげることである。（傍点―原文）」[39]

右、やや長々と引用したパラグラフからも明瞭に看取されるが如く、共産主義の「物質的・技術的基盤」なる概念こそ、「共産主義の完全な建設にかんする他の全ての課題解決の鍵（ключ）（『コムニスト』巻頭論文）[40] ワードであり、且つ『党綱領』全体の扇の要でもあるのだった。フルシチョフ自身このことを強調して曰く、「わが綱領がもし、共産主義社会建設の礎石としての共産主義の物質的・技術的基盤の構築を含んでいないとしたら、それは科学的綱領として無価値ということになろう」[41]。ソビエトの学者は、「唯物史観に依拠し」、「社会発展の客観的法則によって導かれている」共産党が、「物質的基盤の造出をその主たる任務」とすることは当然至極である、と主張するが[42]、いわゆる共産主義思想と総称されているものの中における唯物論的土台決定論と主意主義的要因との絡み合いとその変遷[43]はもっとデリケートなものであり（一例として、成年期マルクスの決定論的社会物理学がレーニンの前衛重視の主意主義によって修正ないし逆転せられた事実を想起せよ）、右のように単純素朴に一方的に論ずるのは誠に早計なのである。それは、ともかく、この共産主義の「物質的・技術的基盤」とは物質的豊かさと殆んど同義語と考えて差しつかえないが、さらに厳密にいうならば、この他ならぬ物質的・技術的基盤の構築こそが物質的豊かさを

「保障・確保する」（フルシチョフ）[44]ものなのである。

(3)　さて、次に、この物質的豊かさないし共産主義の物質的・技術的基盤の造出は、いかにして可能とされるのか？　この問にたいしてフルシチョフの下した解答は、きわめて単純明解なものであった。つまり、人間（トルード・チェラベーカ）労働の生産性を最高度に高めてゆく他はない[45]というもので、なにか奇蹟的な妙薬を期待している大向うの者にとっては些か失望的な代物であった。もっとも、この解答は、生産力の増大に社会的変革の根本的誘因を求めたマルクスの衣鉢を継ぐ共産主義者として、いわば当然のことと言うべきかも知れない[46]。とまれ、共産主義者フルシチョフは、あたかもアメリカ資本主義形成期のベンジャミン・フランクリン哲学を想起させる論法で、人間労働こそ全ての富の源泉であることを、機会ある毎に繰り返したのである。たとえば、鉄道労働者協会席上のスピーチにおいて、フルシチョフは、「労働によって、そして労働によってのみ、共産主義の物質的・技術的基盤を造出することができる[47]」と明言し、また一九六〇年には、「われわれは、共産主義的豊かさの巨大な鉢を、われわれの労働の生産物によって充たしはじめた。これを一夜にして成すことは、不可能である。われわれは、懸命に働かねばならないのだ[48]」と説いた。そして、既出（一二八ページ）のブダペストにおける「グラーシ演説」（一九六四年四月）中、彼はさらに、強調したものである。「結局のところ、グラーシ（ハンガリア名物の肉シチュー料理―筆者註）は、天から降ってくるものではない。豊かな食事と衣料を享受するためには、高度に発達した生産力をもつ必要がある。全ての富は、人間労働によって創り出されるのだ。人間がよく而も長く働けば働くほど、より多くの富が社会のために創り出される[49]」

(4)　更に論を進めて、この人間労働の生産性をいかにして、向上しうると、フルシチョフは考えたか？　まえが

き（一一三ページ）で既述したごとく、人間労働の生産性を促進しうるために政治権力に利用可能なものとして、ふつう(a)物理的強制、(b)物質的刺戟、(c)精神的説得の三つがあるが、スターリン以後になると、後述する理由で、このうち、(a)物理的強制に頼ることが非常にむつかしくなり、また、(b)精神的説得[50]もその効果を十分に発揮しえなくなってきた。そこで、フルシチョフが厭でも応でも主としてフルに活用しなければならなくなったのが、(c)物質的報償という残された手段であった。

フルシチョフが先ず行ったのは、物質的豊かさ（＝至上目標）追求の主要手段として物質的報償制度を採用することが、マルクス・レーニン主義となんら矛盾・相剋するもでない[51]ことを証明する作業だった。たとえば、早くもスターリン没後半年たつかたたない一九五三年九月三日、党中央委総会での演説中において、物質的刺戟概念が社会主義経済の基本原則の一つであると述べた際、フルシチョフは、この概念がレーニンの教えに完全に由来・依拠するものである、と主張した[52]。その時、フルシチョフが引用した『レーニン全集』の「宝庫」（F・バグホーン）[53]中よりのパラグラフとは、次のようなものである。

「直接に熱狂によってではなく、大革命によって生みだされた熱狂の助けをかりて、個人的利益に、個人的関心に、経済計算に立脚して、小農民的な国で国家資本主義を経ながら社会主義に通じる堅固な橋を、まずはじめに建設するよう努力したまえ。さもなければ、諸君は幾百万幾千万という人々を共産主義に導くことができないであろう[54]」（「十月革命によせて」、一九二一年十月十八日）。

序ながら右と並んで、レーニンが物質的関心を重要視した証拠として度々引用されるものとしては、一九二〇年、

トロツキーの平等主義唱道政策を戒めて「労働者とは、物質主義者である」[55]と喝破した発言、ならびに「新経済政策と政治教育の任務」（一九二一年十月十七日）中の次の発言がある。「農民の個人的関心にもとづいて（共産主義を―木村註）建設することが必要である。……困難は個人的関心をもたせることにある。すべての専門家に関心をいだかせること、こうして彼らが生産の発展に関心をもつようにすることが必要である。……そこでわれわれは言う。国民経済のあらゆる部門を個人的関心にもとづいて建設することが必要である、と」[56]

たしかに、マルクスやレーニンが生産性増大のための物質的刺戟制度の活用に反対を唱えずこれを「一種の必要悪と看做した」ことは事実であるかもしれない。なにしろ、レーニンには目的のまえには手段を選ばない傾向があり、ソビエト共和国は、いかなる犠牲を払っても、資本主義のアップ・ツウ・デイトな諸業績を採り入れねばならぬとすら、発言しているからである。[57]しかし、ここで我々が一応心に止めておかねばならないことは、右のフルシチョフによるレーニンの引用句の分脈（コンテキスト）ないし背景である。つまり、右の引用句のほとんど全てが、資本主義への一時的後退戦術が採られた新経済（ネップ）政策の初期においてなされた発言である事実である。レーニンの当時のポイントは、十分な考慮もせずに小農民的な国で物資の国家的生産と国家的分配とを「プロレタリア国家の直接の命令によって共産主義的に組織しよう」[58]とすることの「誤り」[59]を戒める点に存した。したがって、右の第一番目の引用の直前に、レーニンは、つぎのように書いているのである。

「実生活は、われわれの誤りをしめした。一連の過渡期が必要であった。すなわち、共産主義への移行を準備する――長年にわたる努力によって準備する――ためには、国家資本主義と社会主義とが必要であった」[60]（傍点―原文）。

換言するならば、M・タチュの指摘する如く[61]、レーニンは、初期の段階すなわち農民経済から国家資本主義への移行期そして恐らく次の社会主義へ至る段階においてのみ、物質的刺戟に依存することを考えていたのであって、社会主義から共産主義にいたる時期と公式声明されているフルシチョフ期において、尚このような特殊状況下のレーニンの発言を援用するのは、正当性に乏しいと考えられる。

にもかかわらず、物質的刺戟は、「レーニンの原則」に祭り上げられてしまったのである。すなわち、フルシチョフは、一九六一年十月十七日、第二十二回党大会中央委に宛てた演説中において、「わが国における社会主義建設の全ての経験は、物質的関心のレーニン原則（ленинский принцип материальной заинтересованности）の正しさを確認した」[62]（傍点―木村）と宣言し、『新党綱領』は、早速これを受けて次のように刷りこんだ、「党は、共産主義の建設が、物質的関心の原則にたって進められるべきであるという、レーニンの命題から出発している」[63]（傍点―木村）。さらに、フルシチョフは、レーニンの一時的・偶然的だったかも知れない発言を恒常的な原則の地位にまで高めた。即ち、ミンスクでの農業労働者大会の席上、彼は、「物質的関心の原則は、われわれの生活における偶然的（случайный）要素ではない。それは、共産主義建設の原則（принцип）なのである」（傍点―木村）と宣明したのだった。

（1）『マヤコフスキー詩集』小笠原豊樹訳、（東京、弥生書房、一九六四年）、一二六～一三一ページ。

（2）この第一款の前半（つまり一と二）は、前掲拙英字論文と一部重複していることを断っておく。

（3）フルシチョフの「大構想（the grand design）」なる語は、やや異ったコンテクスト下においてであるが、西側専門家たちによって屢々用いられている。たとえば、Adam Ulam, *Expansion & Coexistence: The History of Soviet Foreign Policy*

1917–67. (New York: Frederick A. Praeger, 1968), p. 572; William Hyland and Richard Wallace Shryock, *The Fall of Khrushchev.* (New York: Funk & Wagnalls, 1968), p. 11.

（4）米国のソ連通ユージン・ライオンズは、ソビエト体制に非常に批判的（クリティカル）な近著中で、「共産主義が一般国民に物質的豊かさを与える」という命題は、共産主義「神話（myth）」の一つにすぎない、と断言する。Eygene Lyons, *Workers' Paradise Lost: Fifty Years of Soviet Communism: A Balance Sheet.* (New York: Paperback Library, Inc.), p. 229. 邦訳、『ソビエトの神話と現実—共産主義50年のバランス・シート』、小六毅、（東京、自由アジア社、一九六九年）、二〇三ページ。

（5）この「各人はその能力に応じて働き、各人はその必要に応じて与えられる」という共産主義の代名詞代りとして人口に膾炙している一句は、実はマルクス自身の創作ではなく、一八三九年ルイ・ブランによって定式化されたとのことであるが（野々村一雄『ロシア革命の道—ソヴェト社会主義の五十年—』、東京、潮出版社、一九六七年、二四六ページ）、筆者は未だルイ・ブランの原典をたしかめていない。野々村氏は、続けて、「しかし、この言葉は、マルクスがこういう形でつかってから、マルクス主義観を示すいわばテーゼの役割を果すようにさえなった」と述べられている（同ページ）。

（6）Marx・Engels, *Werke,* band 19, S. 20–22. 邦訳前掲、四三～四五ページ。

（7）*Ibid.,* S. 20. 邦訳、四三ページ。

（8）*Ibid.* 邦訳、四三ページ。

（9）*Ibid.,* S. 22. 邦訳、四五ページ。

（10）*Ibid.* 邦訳、四五ページ。

（11）*Ibid.* 邦訳、四五ページ。

（12）レーニンによるマルクス、エンゲルス思想の意識的・無意識的「誤読」による歪曲については、津田道夫氏の研究参照。『国家と革命の理論』、（東京、青木書店、一九六一年）、『国家論の復権』、（盛田書店、一九六七年）、『国家の死滅』（川島書店、

一九六九年)。

(13) В. И. Ленин, *Государство и революция*. (Москва: Политиздат, 1968), стр. 92-99. 邦訳『世界の名著／レーニン』、江口朴郎他、(東京、中央公論社、一九六六年)、五五八～五六五ページ。

(14) Ленин, там же, стр. 95～96. 邦訳、五六一ページ。

(15) Ленин, там же, стр. 98. 邦訳、五六三～四ページ。

(16) И. В. Сталин, *Сочинения*. (Москва: Госполитиздат), Т. XII, стр. 269-270.

(17) A・ゲルシェンクロンも、本来的に不安定な独裁が権力を継続的に維持してゆくための要件の一つとして、「ユートピア目標」を「遥か遠くの未来」(remote future) に注意深く設定する必要を説いた。Gerschenkron, *op. cit.*, p. 4.

(18) 米国のソ連専門家J・ハザード教授は、「豊かな社会は、常に『共産党宣言』以来の約束の一つであった。レーニンもスターリンも、この目的を決して異った風に解釈しなかった」と述べた後、「とはいえ、レーニンおよびスターリンは、この経済的増大の基盤建設のために、フルシチョフに比べてずっと大きな犠牲を要求した」(傍点—木村)という但し書きをつけることを忘れなかった。John N. Hazard, "L' Embourgeoisement du Droit de Propriété Sovietiqué," *Annuaire de L' U. R. S. S.* (1965), p. 169. また英国のソ連専門家A・ノーヴ教授も、「共産主義は、物質的豊かさを大いに強調する」と書いた後、「スターリンを含むすべてのソビエト指導者の意図が、『原始的蓄積』のための苦しい犠牲が最早や不必要となった将来のいつの日かに、生活水準を引上げることにあったことは確かである」(傍点—木村)と述べている。Alec Nove, "Social Welfare in the U. S. S. R.," Brumberg, *op. cit.*, p. 586.

(19) В. Ф. Майер, *Заработная плата в период перехода к коммунизму*. (Москва: Экономиздат, 1963), стр. 8.

(20) 西側のソ連専門家R・レーベンタール教授も、「共産主義イデオロギーが、あらゆる欲求の豊かな充足がその経済体制の究極の目的たることを宣明している」と書いた直後、アメリカの消費に追い付けという最近の

点は、このユートピア的ヴィジョンをさらに具体的かつ実際的にしたものである」（傍点―木村）と見ている。Richard Lowenthal, "Ideology, Power, and Welfare," Brumberg, *op. cit.*, p. 612.

(21) Хрущев, *Строительство коммунизма в СССР и развитие сельского хозяйства.* (Москва: Госполитиздат, 1963), Т. VI, стр. 336.

(22) たとえば、一九六〇年六月七日、オーストリアのラジオ・TV演説中、「われわれは、今、共産主義社会の建設に着手したところだ。これを具体的に言い直すと、共産主義社会とは、物質的・精神的労働の生産物が誰の手にも入るように溢れんばかりになっているお鉢のようなものである。誰にたいしてでも十分な食物、衣料、靴、住宅、書物が存在するようになるであろう。この状態を、われわれは、共産主義と呼ぶのである」と述べた（*Правда.* 8 июля, 1960）。また、M・フランクランドによれば、フルシチョフの政治的モットーは「ソーセジなしで何の共産主義社会ぞ?」であり、「スープの中に理論をぶち込むことも衣服の中にマルクス主義を入れることも、不可能である。もし共産主義四十年の後に、一杯のミルクないし一足の靴にも事欠くようでは、たとえ如何なる弁明つきでも、共産主義を良いことと信ぜよというのは無理であろう」と述べた。Mark Frankland, *Khrushchev.* (New York: Stein and Day, 1967), p. 148–149 から引用。

(23) E・ライオンズも「グラーシ社会主義」なる項目下に、「フルシチョフが、マルクス主義の全体の趣旨を、一杯のシチューに変えたことは、歴史上記憶にとどめてもよい。彼が東欧の支配圏を訪れている間に言ったことは、すべての共産主義政権が求めているものは、もっとグラーシを、ということであった」と書いている。Lyons, *op. cit.* p. 244. 邦訳、二一五～六ページ。

(24) *Правда,* 7 апреля, 1964.

(25) *Правда,* 2 апреля, 1964.

(26) *Программа…,* стр. 65. 長山訳、八五ページ。ノーボスチ通信社訳、六八ページ。

(27) 最高政治指導者たるフルシチョフの発言したがって又『党綱領』の立場がかようなものであったから、当時のソビエトの文献やパンフレット中に、右にならえの見解が氾濫したのは故なしとしない。ここでは、ごく一例を挙げるに止めるならば、たとえば、Ю・アルバートフは、『共産主義とは一体何か』と銘打った小冊子中で、「共産主義とは、貧困にキッパリと終止符を打ち、その全ての市民に物質的豊かさを保障する社会である」と断言し (Ю. Арбатов, *Что такое коммунизм*. Москва: Госполитиздат, 1960, стр. 8)、『新時代の理想』なる英文宣伝パンフレットは、「共産主義建設の目的は、万人にたいする有り余る物質的・精神的諸価値を創り出すことである」と宣言した *Ideals of New Society*, (Moscow: Novosti Press Agency Publishing House), pp. 49～50.

(28) C・リンデンによれば、フルシチョフは、一九六二年三月五～六日の農業総会で、コズロフ、スースロフ等の重工業優先グループに対立し消費者福祉路線の推進を熱烈に擁護したが、そのさい、「豊かな経済という目標(ゴール)を共産主義の至上の理想(ideal)として」描いた、という(傍点—木村)。Linden, *op. cit.*, p. 141. См. *Правда*, 6 марта, 1962.

(29) アメリカの著名な精神分析医で一九六〇年からCIAの委嘱を受けてフルシチョフのパーソナリティ研究に従事していたB・ウェッジ博士は、フルシチョフ失脚後四年を経た一九六八年十月初めて公開した注目すべき論文中で、「機敏さ」をフルシチョフの第一の特徴として挙げ、さらに次のように書いている。すなわち、フルシチョフは、「非常に敏感で」、「現在の状況を把握し利用することにおいて極度に素走っこく」、「一瞬(モーメント)・毎(バイ)・に(モーメント)」決断を下した。Bryant Wedge, "Khrushchev at a Distance — A Study of Public Personality —," (*Trans-Action*, Oct., 1968), pp. 26～27.

(30) *Правда*, 27 апреля, 1962.

(31) *Правда*, 3 апреля, 1960.

(32) 英国のソ連通で秀れたフルシチョフ伝を書いたE・クランクショーも、フルシチョフの精神が、「本質的に、外部からの圧力や刺戟に敏感に反応する精神であり、しかも、外からの圧力とか刺戟とかが矛盾しているときは、それにたいする彼の反応

もまた矛盾していた」ことを指摘している。Edward Crankshaw, *Khrushchev: A Career*. (New York: Viking Press, 1966), pp. 235～236. 邦訳二三五ページ。

(33) 前掲、高畠通敏、七八ページ。

(34) もちろん、表立っては反古にされていないが、少くとも西側専門家の多くは事実上反古にされている、と見ている。たとえば、Cf. Wolfgang Leonhard, "Politics and Ideology in the Post-Khrushchev Era," *Soviet Politics Since Khrushchev*, edited by Alexander Dallin and Thomas B. Larson (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1968), p. 56, 邦訳『ソ連の指導者と政策—スターリン以後のクレムリン—』、加藤雅彦、(東京、サイマル出版会、一九六九年)、四一二ページ。

(35) П. П. Маслов, *Доход советской семьи*. (Москва: Издательство "Статистика", 1965), стр. 3.

(36) Л. Ильичев, "Теория научного коммунизма в действий," *Коммунист*. (№. 13, 1961), стр. 10.

(37) Ленин, *Полное собрание Сочинений*. (издание четвертое), Т. XXXI, стр. 482. 邦訳、『レーニン全集』(東京、大月書店、一九五八年)、第三十一巻、五一二ページ。

(38) Хрущев, там же, стр. 339.

(39) *Программа*…, стр. 65. 長山訳、八五ページ。ノーボスチ通信社訳、六八ページ。

(40) "Развитие производства: главное в коммунистическом строительстве," *Коммунист*. (№. 18, 1962), стр. 3.

(41) Хрущев, там же, стр. 339.

(42) Л. Е. Жемчужин. А. Ф. Тарунин, *Закономерности перерастания социализма в коммунизм и создание материально-технической базы коммунизма*. (Москва: Издательство "Высшая школа", 1967), стр. 19.

(43) Cf. *Marxism in the Modern World*. edited by Milorad M. Drachkovitch, (Stanford: Stanford University Press, 1965), xi. 邦訳、『現代のマルクス主義—二十世紀に挑戦する思想家たち—』、猪木正道監修、木村汎訳、(東京、社会思想社、一九六

七年)、七ページ。

(44) См. Хрущев, там же, стр. 338-9.

(45) フルシチョフの代弁者イリイチョフも、早速「労働の生産性増大のための斗いと密接に結びついてのみ、共産主義の理想は、共産主義たりうる」と述べ (Л. Ильичев, "Теория научного коммунизма в действии," *Коммунист*. №. 13, сентября, 1961, стр. 16.)、前出の英字宣伝パンフレットも、「普遍的な物質の豊かさに充ちた新社会を創り出すのは、労働である」と宣言した (*Ideals of New Society*, p. 24.)。

(46) E・H・カーも「マルクスの体系の最終的な完成から……多くのものが変化したが……変化をしなかった—あるいはむしろ大いに強化された—もののひとつは、生産力の強調であった」と述べている。Carr, *op. cit.*, p. 6. 邦訳、一三～一四ページ。

(47) С. П. Фигурнов, *Строительство коммунизма и рост благосостояния народа*. (Москва: Издательство Социально-экономической литературы, 1962), стр. 204.

(48) *Правда*, 8 июля, 1960.

(49) *Правда*, 3 апреля, 1964.

(50) いわゆる精神的刺戟の細別分類としては、См. Л. И. Коган, "Диалектика материальных и моральных стимулов к труду," *Диалектика материальной и духовной жизни общества*. (Москва: Издательство "Наука", 1966), стр. 77.

(51) F・バグホーンによれば、マルクス・レーニン主義そのものが「矛盾に充ちた宝庫」であり、いかなる異った解釈も可能だ、と断言する。Barghoorn, "Prospects for Soviet Political Development…", p. 83.

(52) 非スターリン化のイニシァティヴをとりこれを表看板にして政敵たちを蹴落し自己の存在理由を保持していたフルシチョフにとってはいわば当然のことではあったが、彼は、自己の政策のことごとくを、レーニンに依拠しようとした。H・スウェ

アラーも、フルシチョフが「レーニン主義の外套をまとって」「スターリニスト政策から離脱した」点を強調する。Swearer, "Bolshevism ...," p. 93. また、今までのところでは最も秀れたフルシチョフ伝を書いた西側の二人のソ連通も、フルシチョフが自己の政策の正当化を常にレーニンに求めた事情を、ほぼ異句同音につぎのように語っている。まず、M・フランクランドは、「もしスターリンが自己のなんらかの動きにたいする理論的正当化を必要とした場合には（少くともその晩年において）、それを自ら創り出し自らの名前で発表したものである。これにたいして、フルシチョフは、常にレーニンに頼りかからねばならなかった」点に、両指導者の最も大きな相異点を見出している。Frankland, *op. cit.*, p. 197. E・クランクショーも曰く、「彼（＝フルシチョフ―木村）も彼の支持者も、すべてこれまで以上にレーニンを必要としていた。スターリンは、彼自身の権威を持っていたが、フルシチョフには何の権威があるだろうか。彼には自己をレーニンの正しい継承者、レーニン主義の守護者として売り出し、それによって、自己を正当化してもらう以外に方法がなかった」。Crankshaw, *op. cit.*, p. 230. 邦訳、二二九ページ。この結果、フルシチョフは確かに「スターリン跪拝」を打破しえたかも知れないが、そのかわり「レーニン崇拝」に更に一歩進める代償を支払ってのことであった。Barghoon, "Prospects ...," p. 96.

(53) Barghoon, "Prospects ...", p. 83.

(54) Ленин, *Полное собрание Сочинений*. (издание пятое). Т. XXXXIV, стр. 151. 邦訳、『レーニン全集』、第三十三巻、四十五ページ。

(55) Там же, Т. XXXXII, стр. 212.

(56) Там же, Т. XXXXIV, стр 165. 邦訳、『レーニン全集』、第三十三巻、五七～五八ページ。

(57) Там же, Т.XXXVI, стр. 161.

(58) Там же, XXXXIV, стр. 151. 邦訳、第三十三巻、四五ページ。

(59) Там же, стр. 151. 邦訳四十四ページ。

(60) Там же. 邦訳四十五ページ。

(61) Tatu, *op. cit.*, p. 454.

(62) С. С. Каринский, "Сочетание Материальных и моральных стимулов подъёма трудовой активности граждан в период развернутого строительства коммунизма," *Советское Государство и Право.* (№. 8, 1962), стр. 40.

(63) *Программа*… стр. 91. 長山訳一一六ページ、ノボスチ通信社訳、九七ページ。

(64) *Правда*, 18 октября 1961.